タドコロＡ－１、里帰り

草苅晏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タドコロＡ－１、里帰り

【Ｎコード】
Ｎ７８８２ＣＶ

【作者名】
草苅晏

【あらすじ】
姓は田処、名はＡ１。人間離れして優秀な、私の弟分である。
人の名前としてありえない？　人ではないのだからしょうがない。
天は二物を与えずといえども、天に作られたわけでないタドコロＡ－１なら二物や三物余裕である。
――そんな馬鹿な話があるか、とおっしゃるあなたはご慧眼。
これは私の、一世一代の勘違い。

1

ただいま、と久しぶりの実家で言えば、誰も答えない。

荷物を置いて、途中で買った物を冷蔵庫に入れて、上着を脱いでから、やり直す。

通る部屋ごとに電気を点け、居間の電話を手に取る。

ただいま、と電話越しに弟に言えば、おかえり、とさして驚いた様子もなく返ってくる。

「ということで、帰って来なくていいよ」

『なんで里帰り早々乗っ取り宣言してんだよ』

子機を耳と肩に挟んで、ひっそりと歩いていく。携帯電話だと薄すぎて固定が悪いのだ。

母が閉めていった雨戸のせいで、外の気温は高くなかったのに蒸している。もう夕方だから、と胸の中で弁解して、雨戸はそのままに網戸付きの小窓だけを開ける。

『というか悪い、見た?』

「何を?」

『部屋。姉貴の』

「まだだけど。2階暑いし。何、なんか見られたくないもの?」

『ほんと悪い。今かなり散らかってる』

片づけ上手とはお世辞にも言えない弟が、かなり、と念押しするところを見ると、部屋に上がるのは諦めた方がよさそうだ。

玄関に一番近い、普段は使わない和室にも灯りを点け、玄関に下ろしたままだった荷物を放り込む。

「なんでよー、帰ってくるって言っといたのに」
『昨日の夜中急に思い出して探しものしたから』
「で、間に合ったの？」
『間に合わせた』
「ならいいけど」
台所を通るついでに、水を汲んで片手鍋を火にかけた。

『今お袋いる？』
「もう出たみたい。車なかったけど、乗っていったのかな」
『いや、お袋は電車。親父だけ車で追いかけるらしい』
実家に戻ってきた理由のひとつが、留守番だ。親戚連とお盆の打ち合わせを兼ねた旅行に行くという両親についでにと頼まれた。

「今ひとりなの？」
『ん、まあ。これから友達と合流するけど』
「お、ちょうどいい。一緒に外で遊んできなよ」
『この片田舎のどこでだよ』

この町の名と場所をすぐに了解するのは同じ県の人ばかりで、隣県の者ですらだいぶ怪しい。自己紹介で述べる出身が都道府県の単位になる、大学に入ってから知った事実だ。

「小学校の校庭とか」
『おっさん達が野球やってる』
「中学校の校庭とか」
『おばさん達が花笠踊りの練習してる』
「高校の校庭とか」
『天文部がテント張ってる』
「テント？　そんなに部員増えたの？」

『増やそうとしてる段階だろ。今回は山岳部との合同企画らしいから』

「へえ、頑張るねえ。となると、どこも空いてないか」

ちなみにこの界隈は小学校や中学校がひとつきりしかないほど寂れてはいない。縄張り意識の問題で、母校以外はアウェイな気がするのでいくら近所でも入り込まないものである。

『そもそもなんでそんな校庭ばっかなんだよ』

「なんとなく健全な気がして」

『まっすぐ帰るのが一番健全だろうが』

んん、とわざとらしい咳払いをしてみると、仕付けないせいか喉に引っ掛かった。

2

「いやそれがですよ、ただいま我が家は健全な青少年にはお勧めできない環境になってましてですね」
『男でも連れ込んでんのかよ』
「まあ、ねえ」

言葉を濁す。
押入れの奥の薬箱の中を探ると、目当てのものが見つかり、軽く振ってみる。新しくはないが使えるだろう。
なんだかんだと雑に溜め込んでいるのに文句をつけていたが、いざというときに買いに行く手間がないのは実家の便利なところだ。
ついでに客用でないシーツを選んで引っ張り出す。
電話を左に持ち替えて、右手が自由になるよう出したものを左脇にはさんでいく。

「ちょっと、昔馴染のやつに押しかけられちゃってね。それでまあ、これからシリアスになりそうな感じ」
『いや、冗談だろ？』
「いやいや、マジですよ、リトルブラザー」
『リトルとかつけてる場合じゃねえし。ていうか、え、本気でほんとに？』
リトルを外している場合ではあるらしい弟に付き合って、真面目な声を作る。
「はいはい、本気でほんとに」

洗面所に回り、畳み終わった洗濯物の籠から弟のジャージを拝借する。これくらいの大きさがちょうどいいのだ。替えの下着やなにかは持ってきた荷物に入っている。

『で、誰だよ?』
「さあねー」
『単なる知り合い以上の男なんてほとんどいないだろ』
「それは高校に入るまでの話」
『むしろなんで高校入ってからガード下げるんだよ。普通逆だろ』
「いや、なんかそんなに頑張ることもないかーって」
手がだいぶ塞がったので、持っていたものをひとまず玄関脇の和室に放り込む。
『そこから数えても何年だよ』
「何年? って、えーと、高校3年プラス、今2年で、でもまだ7、じゃなくて8月だからー……何年?」

居間のティッシュペーパーの箱を借りることにし、残りの枚数が十分あるのもちらりと確認する。使いさしを選ぶのは、新しいものだと中身が詰まりすぎていて手探りで引き出しにくいためだ。
思いついてプラスチックの屑入れもひとつ運んでおく。客間備え付けの籐のものはこうした場面で使うに忍びない。

『4年ちょい。なあ、飲んでるだろ?』
「何を」
『酒だよ、酒。頭回ってねえぞ』
「おお、酒」

思い出して、台所に戻る。
片手鍋に湯は沸いている。火を止めて、徳利に酒を注いで浸す。
来たついでに、新しい器に卵を溶いて目分量で砂糖を加える。甘い方が好みだ。後は電話を切ってからでいいだろう。

「飲んでないよー、まだ」

『まだっておい。飲む気満々だな、未成年』
「でもほら、お酒っていってもね、甘酒の仲間だから」
『酔っ払いの言い訳は信用ゼロだからな』
「だから、まだ飲んでないって」
気が急く。自分の吐く息はこんなに熱かったっけ、と思う。
それで、と話しだそうとする弟の声に、とにかく、と言葉をぶつけて切っ先を逸らす。

「帰ってくるな、リトル愚弟」
『あ、もしやそれはリトルグレイと掛けてるのか』
「気を確かに保て、弟よ。私はその駄洒落に何の必然性も感じないぞ」
『俺はリトルの必然性を感じねえよ。弟と意味被ってるだろうが』
「いや、リトルはあれだよ、ちょっとおばかさんな弟って意味でその前に係るっていう」
『なお悪いわ』
「まあほら、今夜は熱い夜になりそうだぜ、みたいな、ね？」
これはこれで夜が被っているだろうか、と少し悩んでみる。
『聞く方がいたたまれなくなるくらい棒読みだな』
「いやあ、素面でこの台詞を吐けるほど面の皮厚くないよ」
『素面で堂々と弟を追い出すのはなんなんだよ』
「えーと、じゃあその友達のところに泊めてもらってよ。だめなら天文部のテントにこっそり入ってしまえ。ばれないばれない。そのうち怪談のネタになるだけだから。
たぶん生徒手帳のカバーの隙間に母さんがお金隠しておいてくれてるはずだから、手持ちなかったらそれ使って。あとで補充分は出すから。じゃあよろしくねー、っと」

ここまで言っておけば、友達のところに転がりこむ線で落ち着くだろう。

3

「あ、友達って女の子だったらどうしよう」
ころりと訊き忘れた。
「まいっかー、高校生なんて雑魚寝で十分だし」

2匹だけでも雑魚は雑魚、と当時の天文部の部長は煌めく星空を見上げて言ったものである。部員が増える兆しがあるようで重畳重畳。

今考えてもわけのわからん人であったが、あの人によって男性全般に対する警戒レベルはずいぶんと引き下げられた。

部活の関係で必然的にそれなりに近しくはなったが、だからといって挨拶代わりに腹に一発入れることも背を向ければすかさず膝を崩そうと狙うこともハイタッチと見せかけてやはり腹に一発入れることも握手をすればすかさず指相撲になだれ込むことも、まるでなかったのである。

子機を戻して、固まった首を回す。用事があればとりあえず電話を掛けてみるのが我が家の常である。

ぐいと肩を竦めてから一気に筋肉を緩め、台所に戻る。

「よし、お酒……、って、え?」

慣れない感覚をふいに覚え、びくりと固まったまま元を探る。脇腹のあたりを、私の肌よりほんの少しだけ冷めた感触が、そっと滑り下りていく。

「あー、はいはい。もういいか、な」

服の上からそれを押し留め、少し迷ってからそろりと裾をめくる。

シャワーを浴びたいが、きっと今は叶わない。覚悟して、目を落

とす。

「8度1分。こりゃだめだ」

昔馴染の風邪がどうにもシリアスになりそうな雰囲気を漂わせる中、健全な青少年である弟に帰ってこいとは言えない。

溶いておいた卵をお燗した酒に注ぎ、ちびりと啜る。

「卵酒なんて、甘酒の仲間でしょうがねえ」

どうやら本格的に、熱い夜になりそうである。

4

客間に布団を敷き、運んできた扇風機のタイマーをセットしてタオルケットを胸の上まで引っ張る。

枕元には卵酒と水差し、氷のたっぷり入った魔法瓶を載せた盆と、居間から拝借してきたティッシュペーパーの箱に小さな屑入れ。

電灯は一番弱い、橙のもの。

準備をしている間にも何が引き金になったのかくしゃみを連発し、幾度となく鼻をかむ。少しの辛抱だ。経験上眠ってしまえば鼻も止まる。

あとはただ眠るだけでいい。

風邪をひくのはもう慣れた。風邪で寝込むのも夏冬の恒例だ。

風邪は誰かにうつすと治るというが、私の調子の悪いのが治まると弟もげほげほやり出したし、弟が外を駆け回る頃になると弟の友人連中がちらほら欠けるのが常であった。

その中でいつも何事もなく顔を出すタドコロＡ－１を見るたび、対ウイルスソフトというのは便利なものだなあ、とひたすら感心したものである。

5

私は夢を見ている、と夢の中で思う。

熱のときに見る夢は、目覚めるまでの焦燥と目覚めてからの喪失感がいつも似通っている。

白いから病院だ、と断定してしまえるくらい、病院には特有の白さがある。

「お名前はもうお決めになったんですか？」

よそいきの色をのせた声で問う母の腹は、ふくらみがだいぶ目立つ。

わけもなく袖を引くと、顔を向けないまま頭をぽんと撫でられた。

「はい、エイイチ、と。英語のエイに、数字のイチと書きます」

待合室の長椅子に並んで座っているから、母の陰になって田処夫人の姿は見えない。

その腕に抱かれているのであろう赤ん坊を見ようと首を伸ばすと、柔らかそうな白いおくるみだけが目に入った。

「エイイチくん。良い名前ですね」

「ええ、主人と考えたんですが、向こうの両親もすぐ賛成してくれまして」

そこまで口にしてから田処夫人は、ほかにも何組か子連れの人がいる場をはばかったのか声を低くする。

「今時の名前というのはほら、妙に凝っていて読めなかったりするでしょう？　ですけどね、やっぱりこれくらい簡単な方がいい、と主人も言いまして」

「そうですねえ。やっぱり、一生付き合っていく名前ですからね」

相槌を打つ母の陰で、首をかしげる。

――英語のAに、数字の1。

いや奥さん、なかなかどうして思い切った名前である。

しかし慎ましやかな子供であった私は、母に叱られない程度に足をぷらぷらさせるに留めた。

3歳になるかならないか、弟が生まれるのはもう少し後のことだ。

6

タドコロA－1がいつから我が家に来るようになったのは定かではないが、その頃には二足歩行がおぼつかない段階はとうに過ぎていたと思う。

弟は級友をよく引き連れてきたが、その母親たちはどうも目の届く場所にはいても連中の遊びに加わらない私をお目付役として認識しているらしかった。

そして私も、お姉ちゃんはさすがに落ち着いてるねえ、しっかりしていていいわねえ、とお世辞混じりに褒めそやされれば、「お宅の息子さんなんて片手と片足で捻じ伏せられますけど、まともに相手をするのは疲れますから」などと言うこともなく、いえそんな、とそっと目を伏せる慎ましやかな子供であったため、特に齟齬はなかった。

「お庭があるって、いいわよねえ。メンテナンスが大変だからマンションで十分だろう、って主人は言うんですけど」

我が家に来ると、田処夫人はよくそう口にする。

メインテナンス、というのが後に知ることになった田処氏の正確な発音だが、田処夫人はほかのところはなかなかうまく口真似をするのにそこだけは頑なに特徴を無視していた。

イヌツゲに囲まれ、表の門と勝手口で対になるように沈丁花が植えられてはいるが、それだけの庭なのでメンテナンスも何も年に数回植木屋を呼ぶ程度である。

壊すものもないので駆け回るに都合がよく、連中のせいでいつも中央の土は一際固く踏み固められていた。

7

「そういえば千寿ちゃん、エイイチが赤ちゃんの頃会ったの覚えてる？」

田処夫人は今時かと問われればそうでもない私の名前が趣味に合ったらしく、何かにつけて女学生めいた調子で、千寿ちゃん、と呼び掛けられた。

「えーと、はい、なんとなく」

「あら嬉しい。よろしくね」

覚えていたのは田処家満場一致で決定したらしい例の命名のせいなので、そう単純に喜んでもらっても困るな、と思いつつやはり何も言及しないことを選ぶ私である。

初対面と呼ぶべきときには、正直なところ名前のインパクトが強すぎて本人については曖昧だったのだが、弟に連れられてきたタドコロＡ一1はすでに名と競って負けないだけの印象を十二分に与えた。

タドコロＡ一1を一言で表すなら、「整っている」。姿態も、動作も、思考も、感心する隙すら差し挟めないほど整っている。

最大の効果を生み出すために緻密な計算を繰り返した結果、というよりも、いろいろ考えるのは面倒だからひとつだけ数値を決めてあとは黄金比に代入してしまえ、といういささか手抜きの感すら得てしまうくらいである。

赤ん坊だった時代があるなんて信じられない、という人がいる。

タドコロＡ一1はそのタイプで、しかも後から振り返るとこうして子供だった時代があるということも信じられないのだろうな、と

確信のように思った。

8

しかしＡ１でエイイチとはまるで製造番号ではないか。Ｄ５１でデゴイチと同列である。人名としてお世辞にもふさわしいとはいえない。

田処夫人にそれとなく来歴を質していいものか悩んでいた私は、やがてとある可能性に思い至ることになる。

さて、我が家の隣には英語教室がある。

えれめのぴー、と謎めいた歌詞の入ったきらきら星や、ブイではなくヴィー、ゼットでなくズィー、と教え込まれるらしいアルファベットの読み方や、先生をファーストネームで呼ぶ習慣は、子供心に好奇心をそそられるものがあった。

だからといって通うかといえばそういうわけでもなく、気になるなら行けば、と母に水を向けられるたびに、まさか、と答えてきた。

門前の小僧の経のごとく、小学校入学前にして習わぬまでも英単語のひとつやふたつ綴れるようになっている私は、不意に気付く。

アップルのＡ。アリゲーターのＡ。

そしてＡは、アンドロイドのＡ。

まさか、である。

9

男は常に何かと戦っている。弟を見ていると常々そう思う。食うか寝るかスプラッタ映画を見るほかは、基本的に戦っている。私もたぶん戦っている。違うのは、不戦勝も白星として数えることくらいだ。

タドコロＡ－１は戦わない。球拾いか、審判か、庭を見渡せる居間で私の隣にいるかだ。

実際のところタドコロＡ－１は何が楽しくて我が家に来るのか、何度目かの訪問を迎えてもまったくわからなかった。

宿題は済ませた。三つ編みも左右にできた。おやつにはまだ早い。浅く日が差し込む縁側に腰を下ろし、足先に沓脱ぎのぶかぶかのサンダルを引っ掛ける。足を乱暴に蹴り上げるたびに地面の濃い影が揺れた。

庭は剣と刀と十手とヨーヨーと音の出る銃と折り紙の手裏剣とが交錯する大乱戦である。

連中にとって、共に戦う仲間にも、勝利を奉げる女王にも、守るべき姫にもなれない私は、中立なままぼんやり見守る。

タドコロＡ－１は隣で妙にきれいな胡坐をかいて、同じ方向を見ていた。

「エイイチは、戦わないの？」

問いを投げたのは、気まぐれだった。

「戦わないの？」

タドコロＡ－１は意味がわからないというように私を見て、私もタドコロＡ－１がそんな表情を浮かべる理由がわからずじっと見返す。

しばらくしてから、タドコロＡ一1は立ち上がり家の奥へと向かう。

ああ行ってしまったな、と思っていると、すぐに戻ってきた。玄関から靴を取ってきたらしい。

足を差し入れると地面に飛び降り、とんとん、と爪先で地面を叩いてから、歩み出す。

負ける気のない背中だと思った。

10

「終わった」

奪ってきた刀だの飛び道具だのをひとつまたひとつと縁側にこぼし、タドコロA－1は面白くもなさそうに安っぽい金色の剣をひとふり掲げる。

「早いね」

「うん」

それを正面に受けて、ゆるゆると腰を上げる。縁側に立ち上がると、もともとの身長の差に底上げ分が加わって、タドコロA－1の頭を見下ろす格好になった。

「ばっかじゃないの？」

タドコロA－1を面と向かって馬鹿にしたのは後にも先にもそれ限りだ。

「1回勝てば終わり？　それで抜けられると思った？」

剣を奪い取って切っ先を突きつける。

「甘いよ。それなら、私が勝つ」

学年が3つ違えば、その分口も回る。力も強い。それを行使した。それだけのことだ。

単なるお姉さんとしてあらあらまあまあと世話を焼くほど、私は面倒見のよい人間ではない。

手を出されたら腹が立つ。足を出されたら腸が煮える。手加減ならしてやる、頭をはたき返して何が悪い。

勝ちたいと思ったことはないが、挑まれたなら負けたくない。舐められたら面倒だ。

「戦いは、終わらないの。こんなちゃちなニセモノなんか、戦う理由じゃないんだよ。武器を取り上げたって、戦う人は戦うの」
剣で投げやりに庭を示せば、ハイパーとかウルトラとかマックスとかギガバイトとか叫びながら連中が思い思いに飛び蹴りを決めていた。

「勝ったら負けるまで戦うし、負けたら勝つまで戦うの。相手が敵ならもちろん戦うし、敵が味方になっても新しい敵と戦うんだよ」
「それ、終わらないと思う」
「うん、終わらないよ」
「終わらないの？」
「終わらないよ」
「で、いつ終わるの？」
「終わらないんだってば」

視線をぶつけて、譲らない。
こうすれば、折れるのはタドコロＡ－１だとさっき学んだ。

「……行ってくる」
タドコロＡ－１はほのかに諦めを漂わせて庭に戻っていく。
「うん、行ってらっしゃい。あ、これ、持ってく？」
ぽいと放った金の剣をタドコロＡ－１は器用に後ろ手に受け取る。

スーパーオキシドラジカル、というだいぶやる気のない掛け声とともに脚が宙を裂いた。

11

ぎゅるぎゅると、摩擦が熱を生みやけどするほど温度が上がるように、じゃれる彼らの甘噛みの歯は、知らず本物の牙になる。

その前に。

仏壇の鉦を、台所で茶飲み話をする母親連の眉をひそめさせない程度に強く打ち鳴らす。

残響を添わせた手のひらに吸い取って、供えてあるお持たせの菓子を縁側の、庭から手を伸ばしても届きそうで届かない位置まで運ぶ。

遠くからちらちらと様子を窺う連中に、台所で、手を、洗ってから、食え、とジェスチャーで告げる。なにそれ、いみふめー、とととぼける連中も、お先に、と私がわざとらしく身を翻せば我先にと沓脱ぎに向かってくる。

ひとり残されてきょとんとするタドコロＡ－１を、早くと急かす。

「終わらないけど、休憩はしないとね」

連中に追い越されるままに最後尾になって、タドコロＡ－１と並び立って手を洗う。

「で、スーパーオキシドラジカルって何？」

「ウルトラバイオレット系の攻撃」

「ふうん？」

タドコロＡ－１は基本訊かれたことにしか答えないので、それしか聞いてやらないことにした。

手を拭いて、冷蔵庫からジュースの缶を人数分持っていく。

縁側に膝をつくと同時に、頭にぱさりと何かがかぶせられ、視界

が狭くなった。慌てて持ち上げると、麦藁帽らしい。見覚えがある。私のだ。

振り返れば誰の姿も見えず、ちょうど隣にタドコロＡ－１が腰を下ろすところだった。

「なによ？」

「防御には帽子が有効」

なんとなく負けた気がしたが、素直にかぶっておいてやった。

その後「ロボット三原則」なるものを知った私は青ざめることになる。

手加減は上手くなったと思うので開発者諸兄はよしとしてほしい。平に容赦を乞う。

12

ろくばん、いきます、と弟が羽根布団に頭から突っ込み、埋もれたたまま笑う。

私も笑う。でもすぐに気付く。まずい、笑いすぎた。息を吐くとともにひゅう、とかすかに音がする。

くたびれた布団は人の形にぼこりとへこみ、けれどすぐにもこもこと立ち上がってくる。もう2順目だ。

7番の準備が終わる前に、お水飲もうかな、とそろりと言い置いて、背を向ける。タドコロA－1の視線が追ってくるが、遮るように襖を閉める。

騒ぐほどのことではない。少し休めば治まるのだ。

台所に向かう途中、あら千寿ちゃん、と田処夫人に呼び止められる。

「クリスマスだからクッキーとね、ケーキを焼こうと思うの」

前の年もその前の年も、クリスマスだからどうこうとは聞いたことがないが、田処夫人としては今年はそういう方針らしい。

「よければうちに来て、手伝ってくれないかしら。もちろん、エイイチにも手伝わせるけど。ほら、エイイチのお友達ってほかは男の子しかいないし」

田処夫人は私の後ろにちらと視線を投げて、きれいに笑む。

「お菓子作るときに、埃立ててほしくないじゃない？」

斬新なスカウト理由である。

13

「きれいな髪だね。しかしそんなに長いとメインテナンスが大変だろう」

初めてお会いした田処氏はそつなく褒め言葉を口にし、その上気遣いまでも見せてくれた。

「よ・け・い・なお世話よ。でもそうね、千寿ちゃんはバンダナしましょうか。エイイチ、洗ってあるの取ってきて。あ、せっかくだから自分の分もね」

そうか三角巾ではないのか、とタドコロＡ－１からバンダナを受け取るとき、いつの間にか背が私の肩を越しているのにふと気付いた。

量る、混ぜる、焼く。ただし、レシピ通りに。

お菓子作りというのは、要するにこれだけであった。

人間はレシピ通りに動けばいいが、機械を動かすにはさらに取扱説明書と、さらにそれに従う人間が必要である。

「オーブンの設定ってこれでよかったのかしら。まあ、何事もやってみないとわからないしねえ」

田処夫人はレシピとはかろうじてお付き合いできても取扱説明書とはご縁のない人であった。

幸いなことに田処氏は田処家の電気ならびにガス製品を掌握しているらしく、一番手が汚れていない私が伝令役となる。

14

田処家は田処夫人のエプロンのささやかなレースが華やかに映るほど簡素ではあったが、だからといって殺風景でもなかった。

リビングには我が家より一回り大きいテレビがあるのに、田処氏は書斎と呼ぶにはやけに日当たりのよい仕事部屋の、出窓のさぼてんの隣に小型のテレビを置いて見入っていた。

薄く開いた扉越しに背中だけが目に入る。

漏れてくる声は、テレビからのようだ。田処氏はぶつぶつと途切れなく何事か呟き続けているが、そちらは聞き取れない。

「なかなかのものを揃えているようだな」

「はい。こちらは、ご存知鎌倉幕府初代征夷大将軍、源頼朝公のされこうべでございます」

「ほう、それは……しかしちと小さくはないか」

「ええ、頼朝公5歳のときのされこうべで」

「ふむ。して、そちらは？」

「頼朝公10歳のときのされこうべでございます」

「ほほう」

ほほう、と私も頷く。道理でタドコロA－1はよく育つと思った。しかしネコ型ロボットが生まれるはずの日には完成できそうにない、などとニュースで騒いでいる割に、隠れたところで日本の技術は進んでいる。

「あのー」

目が合う。田処氏はぎこちない表情で音を断ち切った。

「あの、すいません、オーブンの使い方なんですけど」

「これはまあ、ほら、まだわからないかもしれないけど勤めてると時期によっていろいろやらなきゃいけないことがあってね、ほら年の瀬はね、いろいろとあれだから」
「お仕事、ですか？」
「いや、違うんだ。これはプライベート？　いや、仕事の延長か？　でも厳密には仕事じゃないし、まあとにかく、ほんとに気にしないでいいから。だからその、ふたりには」
「言いませんけど」
「助かるよ、ありがとう。それでなんだっけ、オーブン？　そんなに複雑じゃないと思うけどなあ。よし、キッチン行こうか」

タドコロＡ－１を含めた田処家の電気ならびにガス製品を掌握しているらしい田処氏は、頼もしく立ち上がる。

15

白いケーキは素人ケーキ、黒いケーキは玄人ケーキ。

隣の英語教室は、１０周年の記念ということで、教室を開放して「クリスマスお楽しみ会」とやらを開いていた。

参加条件は、「お料理もしくはお菓子を1家族につき1品持参」のみであり、テーブルにはデコレーションケーキから味付のりまで多種多様な「1品」が並んでいた。

田処夫人がお菓子作りを思い立ったのもどうやらこのためであったらしい。

持ち寄りパーティは伏魔殿である。

タドコロＡ－1はよくわからん特殊能力によって見ただけで味の良しあしがわかるらしく、白黒つける呪文を教えてくれた。

黒いケーキの中でも、絶品だったのがハトルテとやらだ。

ザ・ハトルテ、と伊達に定冠詞がついているわけではない。この世にただひとつしかない太陽（ザ・サン）や月（ザ・ムーン）と並び立つ存在感である。

いつかケーキ屋に行ったときにねだれるよう、タドコロＡ－1相手にハトルテの名前を練習し、7の段を唱えた後にも思い出せることを確認してから料理に取り掛かる。

「あれ、そういえばエイイチのお母さんと作ったのって」

「そこの、白いの」

「……まああれだよね、せっかくだし初めてのやつとか試してみないとね」

さりげなく置かれたおむすびや大学いもを確保してから、未知の味覚を開拓していくことにした。

16

「お楽しみ会」というからには余興がつきものである。
できなければできないで、教室の子に混じってクリスマスソングを歌えばいいだけという抜け道があるらしく、私は特に準備はしていなかった。

「ねえ、エイイチはなにやるの？」
「マジック」
「へー、マジックなんかできるんだ」
しばらく無言であったタドコロＡ－１は、何かこちゃこちゃやってから右手をポケットから取り出しこちらに向けた。

「手に磁石がくっつきます」
ものすごく淡々とタドコロＡ－１は言う。見ればわかる。
「おわり」
終わりってそれだけか。それだけなのか、タドコロＡ－１。

「えー？　それさあ、……やめときなよ」
正体がばれるじゃないか、と言い募りたい気持ちに駆られて、ふと、気になった。
タドコロＡ－１は、自分の正体に気付いているのだろうか。
普通の人間は手に磁石がくっついたりしない。だからこそ、タドコロＡ－１のマジックはマジックとして成立するのだ。

「なんで？」
真顔で問われて、なんでと言いたいのはこっちだと思う。
なんで、の後に続く言葉は思いつかなくて、だから代わりの理由を紡ぐ。

「だってほら、クリスマスだよ？　クリスマスなのに、エイイチの手に磁石がくっついたからってさあ、ぜんっぜん、なんっにも、楽しくないもん」
きっぱりと言い放つ。

手に磁石がくっつきます。おわり。
だから何なのかと言われればそれ以上の意味などない。
これはその程度のことだし、ここはその程度の場だ。

「じゃあどうするの」
隅に立て掛けてあった発泡スチロールの蓋らしきものを引っ張り出して、一発えいやと殴って突き破り、タドコロＡ－１に差し出す。
私のこぶしより少し大きいくらいの穴からタドコロＡ－１の両目が覗く。

「冷蔵庫になりなさい」

17

「普段からクールなタドコロエイイチくんは、ついに冷蔵庫人間になってしまいました」

ものはずみでアシスタントとして参加することになった私は、主婦に扮するということで拝借したエプロンをつけている。

「この扉には種も仕掛けもありません」

タドコロＡ－１は顔の前に構えた発泡スチロールの蓋を、客席から見て右側に開く。

「だからもちろん、磁石もくっついたりしません」

蓋を開いた状態のまま、磁石を添わせればぽとりと落ちる。

「でもなんと！　こうして扉を閉めると磁石がくっつきます」

事前に爪で印をつけておいた場所に磁石を近づけていくと、引き寄せられる感覚がある。私の手から完全に離れても床に落ちない。

おお、とリアクションが返ってくる。ここを逃したらいつ反応したらいいかわからない、とでもいうような揃いぶりである。

普通の冷蔵庫は扉を開けたからといって磁石が取れたりはしないが、皆それを指摘するどころではないようだ。気持ちはわかる。なんたって冷蔵庫人間である。

「以上、冷蔵庫人間の不思議でした」

冷蔵庫を冠しているだけで、まだ人間の範疇だ。いい仕事をしたな、自分、と思っていたが、よく考えるとあの名前でばれるとかばれないとかいまさらである。

18

「ありがとうございました」
借りたエプロンを英語教室の先生に返す。かなりの大柄なのでエプロンも大きい。

田処夫人には不満げに、先に言ってくれたら私のを貸せたのに、と言われたが、生来慎ましやかな私が「お宅の息子さんが体を張ったマジックをやろうとしてますけど、アシスタントをしたいのでエプロンを貸してください」と厚顔にも申し出るなどできない相談だ。

「エィプロン、お似合いでしたよ」
「エィプロン？」
聞こえたままを鸚鵡返しにすると、先生は満足そうに大きく頷く。
「そう、Ａｐｒｏｎ。アルファベットのＡは『ア』と発音するのが基本だけど、『エイ』とも読むんですよ」
教室に通っているわけでもない私に教えてくれるのは親切なのか、それとも子供が入り乱れて誰が誰だかわからなくなっているだけか、とにかく先生は言って、例を挙げる。

エィプロンのＡ。エイプリルのＡ。
そしてＡは、エイリアンのＡ。

これはさすがに、まさか、であろう。

19

タドコロＡ－１が木から落ちた。
ついでに弟も落ちて、同じ病院に運ばれた。

学年が上がるにつれ集う場所は我が家とは限らなくなったものの、タドコロＡ－１は相変わらず弟連中と行動を共にしていたようである。

タドコロＡ－１の頑丈さなどすでに重々承知の私は、こんな馬鹿なことまで付き合わなくてよいものを、と心配するより先にとことん呆れた。というより、そもそも運ぶのは病院でいいのか。

母に連れられて弟を迎えに行く。
先に到着していた田処夫妻によると、タドコロＡ－１の方は一見したところまるで怪我はないという。レントゲンでは異常はなかったが、念のためイモアライなる検査を受けているらしい。

母が手当てを終えた弟に説教をしている間、タドコロＡ－１の様子を見に行くことにした。
いかにも物々しい金属製の扉の前でうろうろしていると、派手な色使いの張り紙が目に入る。

「注意！！
金属製品持ち込み厳禁」

腕時計、ボールペン、ヘアピン、アクセサリー、と挙げられているこまごまとした例を薙ぎ払うように、衝撃的な写真。

「天井に、消火器」

白いドーナツ状の筒。中に差しこまれるベッド。浮輪に嵌り込んだかのように、アーチを描く筒の天井に重力に逆らってへばりつく消火器。

「違うよ、消火器は赤いでしょう。あれは黒いから酸素ボンベだよ」
白い服を着た誰かが、教えてくれる。
そんなこと、どうでもいい。胸騒ぎがする。嫌な感じだ。

「すごい写真だよねえ。幸いなことにうちの病院じゃないけど」
「金属、は、だめ？」
「危険だから絶対だめ。すごい勢いで引っ張られて、一度くっついちゃうと全然取れない」
「……どうして」
「ＭＲＩは、すごく強力な磁石だから」

「エム、アールアイ？」
イモアライではなく。

「そう、ＭＲＩ」
ＭＲＩのＭはマグネットのＭ。

――手に磁石がくっつきます。

気が、遠くなった。

20

音がした、気がする。

目が覚めた。

時間はわからない。じっとりと汗が寝巻とシーツに染みている。タオルケットは蹴り飛ばされ足元に丸まっていた。

おそるおそる、声を出す。

「たけ、ひと」

ざらざらした声だ。喉に引っ掛かる。鼻が詰まると口で呼吸するせいだ。

腹這いになって水差しからコップに水を注ぎ、温いままに口に流し込む。

「建人ー、帰ったの？」

大きめの声で呼んでも、返事はない。

それが残念なのかそうでないのか、自分でもわからないが、とにかくひとりの方が気は抜ける。

「着替えるか」

立ち上がると妙な具合にふらついた。熱のときの常である。

ぽい、とすべてを脱ぎ捨て、新しいものに替えるとだいぶすっきりした。弟から勝手に拝借したジャージを羽織って、シーツも用意しておいたものと交換する。

汗を吸ったものを置いておきたくもないので、洗濯場に持っていきがてら手洗いも済ます。

部屋に戻り、魔法瓶の氷を数個コップにあけてひとつ口に含む。

残りは水を足して飲み干した。
ぼうっと布団の上に座り込んでいると、くしん、へくしん、と続けざまにくしゃみが出て、水っぽい鼻をかんだ。
ジャージを脱いで、代わりにタオルケットを被る。
目を閉じれば、体は眠りに沈みこむ。

21

風邪だのなんだのは、基本寝れば治る。
あまり丈夫でないわりに、私は薬や病院にはほとんど縁がなかった。

白いから病院だ、と目を開けるとほぼ同時に思う。カーテンで仕切られたベッドのようだ。私はここで何をしているのだろう。どうして私は。

「エイイチ」
がばりと体を起こすと、ざあ、と血が重力に従って下がるのが嫌になるほどわかる。
目をぎゅっと瞑ってその感覚を逃がす。

目を開けて、私は夢を見ていると思う。それも、ずいぶんと都合のいい。
タドコロA－1がそこに立っていることが、それくらい信じられなかった。

「エイイチ？」
「うん」
「なんともない？」
「大丈夫」
「ほんとに？」
「平気」
「そっか。でも、もう、やだよ」

私は、無事でよかった、なんて言ってやらない。
ぜんぜん、なんにも、よくない。
人は自ら治る。ものは、直すまで直らない。
人間じゃないから大丈夫だね、と言えるのは、人間じゃないタドコロA－1の直し方をわかっている人だけだ。
私にはタドコロA－1の作り方も、直し方もわからない。
壊し方すらわからないのに。
勝手に、壊れるな。

「ねえ、自分が何をやっちゃだめかくらいわかるでしょう？　わかってよ」
タドコロA－1のためではなく、自分のために、言う。
「スプラックになってからじゃ遅いんだよ」
「……スプラック？」
「スプラック？」
しばらく無言で見つめ合う。

「それを言うならスプラッタ！」
いつの間にか脇で見ていた弟が声を上げ、同じく控えていたらしい田処夫妻と母がそれをきっかけに噴き出す。
「なんでいつも言えてるのにこの場面で間違うんだよ」
「違うもん、スプラッタくらい余裕で言えるし」
「へー、言ってみれば？　スプラッタスプラッタ」
「スプラッタスプラッタスプラッタスプラッタ」
馬鹿にするな弟め。私が言いたかったのは、廃車工場でよく見る、新聞の切り抜きも指す、スプラ、じゃなくて、そう、スクラップ。

「笑い事じゃないでしょう、お宅の息子さんがもう少しでスクラップになるところだったんですよ」などと田処夫妻に苦言を呈するには慎ましやかにすぎる私は、とりあえず母に止められるまで弟とス

プラッタスプラッタ言い合い続けることになった。

しかし、部分部分は成長に合わせて交換するにしても、結局のところタドコロＡ－１は何でできているのだろう。

その疑問は社会科見学でごみ処理場を訪れたときに解消されることとなった。

つまり、スチールではなくアルミらしい。

22

いかにも中身の詰まっていなそうなランドセルの揺すられる音とともに、ばたばたと足音が迫ってくるので、半歩横にずれてから身を反転させる。

小中の通学路は途中から重なるので気が抜けない。

「エイイチ、天才だって」

案の定弟だ。言うとともに額の正中を狙ってきたチョップを前腕で止め、鞄を預けてその後の攻撃を封じる。

「そっかー、もうそんな時期だね」

クラスの半数が８０点以上を取る小学校のテストで、天才のなんのと騒ぐことはない。受験もなければ模試もない片田舎の小学生にとって、全国区の順位などは６年生時の外部テストまで縁がないのだ。

「驚かないわけ？」

前を歩くと踵を踏まれるし、かといって先を譲ればランドセルの蓋を開けられないかとちょくちょく自転されて面倒なので、歩調を合わせつつ家路を辿る。

「まあ、エイイチだしね」

「そりゃそうなんだけどさー、もうちょっとさー」

私の反応の薄さに業を煮やしたらしく、帰れば今度は洗濯物を仕分けている母の背に、エイイチ天才だって、と突撃する。

「へえ、わかっててもやっぱりすごいもんだねえ」

感心するときの母は妙に年寄り臭い口調になる。

「それでさ、どっか受験するかもだって」

どこかねえ、と母はいくつか県内の私立の名を上げるが、弟は首

を振る。
「あの子は目立つからね。同じような子が集まってくるところの方が楽かもしれない」
かもしれない、と言いつつもおそらく母は、タドコロA－1はきっと行くと確信していた。
私と同じように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7882cv/

タドコロA-1、里帰り

2015年9月17日00時56分発行